一般社団法人
日本ケーブルテレビ連盟

NEWS RELEASE

2019 年 11 月 19 日

一般社団法人　日本ケーブルテレビ連盟

第 39 回「地方の時代」映像祭 2019　入賞作品発表
大垣ケーブルテレビに審査委員特別賞！

「地方の時代」映像祭実行委員会（吹田市、関西大学、日本放送協会、日本民間放送連盟、日本ケーブルテレビ連盟）では、11月16日（土）から22日（金）の間、第39回「地方の時代」映像祭2019を関西大学千里山キャンパスで開催しております。

「地方の時代」映像祭は、放送局部門、ケーブルテレビ部門、市民・学生・自治体部門、高校生（中学生）部門の4つの部門で成っており、一般市民から放送局までが一堂に集まる映像コンテストです。1980年の開始以来39回を数え、今年は279作品の応募（内訳：放送局145、ケーブルテレビ55、市民・学生・自治体63、高校生16）がありました。

11月16日（土）に開催した贈賞式では、コンテストの各賞を発表し、グランプリは放送局部門「海を洗う　～果てしなき機雷戦～」（山口朝日放送）が獲得。ケーブルテレビ部門は下記の7作品が入選し、3作品が優秀賞になったことに加え、昨年に続き、今年もグランプリに次ぐ特別賞が設けられ、「ふとうこうのじかん」（大垣ケーブルテレビ）に審査委員特別賞が贈られました。

「ふとうこうのじかん」は、不登校生の自立を支援している「西濃学園」に通う生徒の毎日を捉えた作品で、現代社会の課題に真摯に向き合い、難しい取材対象ながら丁寧な取材を重ねた番組づくりが高く評価されました。和田省一審査委員長が審査講評の壇上で紹介し、審査委員特別賞の発表を受けた大塚英司さん（大垣ケーブルテレビ）は、「この映像祭には毎年訪れ、上映作品を見て勉強し、目標としてきた。作品で伝えたかったことが届き、評価されたことは大変嬉しい。」とコメントしました。

↑大塚英司さん（大垣）

なお、許諾が確認できた作品は、AJC-CMS（全国ケーブルテレビコンテンツ流通システム）を通じて全国のケーブルテレビに配信する予定です。

また、グランプリ作品は、2019年12月7日（土）13:30～17:00　関西大学東京センターにおいて上映会を行います。ぜひご来場ください。

http://www.chihounojidai.jp/guide/event.html

↑ケーブルテレビ部門受賞の皆さん

＜ケーブルテレビ部門　入選作品＞

審査委員特別賞　「ふとうこうのじかん」　大垣ケーブルテレビ

優秀賞　「ふとうこうのじかん」　大垣ケーブルテレビ
「我がふるさとの中海　～「環境新聞」30年の歩み～」　中海テレビ放送
「峻厳の答酬　～山武郡市広域行政組合消防本部　新人研修～」　広域高速ネット二九六

選　奨　「地域力の創造！　栄町「支温の家」より」　伊万里ケーブルテレビジョン
「ざざ虫漁としげまさん」　エコーシティー・駒ヶ岳
「別れの乳房　～97歳　赤十字従軍看護婦の証言～」　秋田ケーブルテレビ
「天災は忘れた頃に…入鹿切れ　死者941人」　中部ケーブルネットワーク

～本件に関するお問合せは下記までお願いいたします～
一般社団法人　日本ケーブルテレビ連盟　〈http://www.catv-jcta.jp〉
コンテンツ部　担当：原・大平・中田　TEL：03-3566-8200　E-mail：jcta_contents-lab@catv.or.jp

ケーブルテレビ部門

大垣ケーブルテレビ　[2019/6/3放送]

ふとうこうのじかん

◎プロデューサー／大塚英司
◎ディレクター／大塚英司

[60 分]

●制作意図

「がんばることができない子」あるいは「コミュニケーションがうまくいかない子」。不登校の三文字にそういうイメージがあるのなら、取材を始めた日の私と同じように、驚いてほしいと思いました。親元を離れた子どもたちが、寮生活で寝食を共にしながら、部活動にも熱中していました。どう見ても「がんばることができない子」ではありませんでした。だから「どうして不登校になったの？」とストレートに質問してみました。少し不器用だけど、一生懸命、自分の過去と未来のことを語り始めました。どう聞いても「コミュニケーションがうまくいかない子」ではありませんでした。

●あらすじ

みなさんが子どものころ、学校に来られなくなった子が、一人、二人、いませんでしたか？番組の舞台は、岐阜県揖斐川町にある私立西濃学園。中学生・高校生およそ50人が学んでいます。学園の許可を得て、昨年9月からの約3か月間、カメラが入りました。自分を変えたい、立ち直るきっかけをつかみたいと、西濃学園を選んだ子どもたちが、普通に勉強したり、普通にスポーツしたり、普通に青春しています。不登校・ひきこもりの経験者が、大人になってから社会の理解を声高に訴える番組ではありません。自分が変わる日が来るまで、子どものまま、じっとエネルギーをたくわえている「ふとうこうのじかん」を見つめました。

中海テレビ放送　[2018/12/1放送]

我がふるさとの中海
～「環境新聞」30年の歩み～

◎プロデューサー／横木俊司
◎ディレクター／上田敏之

[36 分]

●制作意図

1989年（平成元年）より毎月発行されている「環境新聞　中海」。去年11月で30年を迎えた。この手作り新聞を発行しているのが中海の湖岸に住む向井哲朗（77）さんです。向井さんが気がかりだったのが中海の水質汚濁でした。特に原因の一つになっている生活排水対策は最優先に取り組み、廃パンストによる台所排水の浄化や食器の汚れをそのまま洗って排水せず、ぼろ布で拭き取ってから食器を洗うなど家庭で出来ることを地域の人たちに強く訴え実践して来ました。番組では向井さんの「環境問題は足元から」という強い思いを軸に、30年に及ぶ「環境新聞」を通して、中海を取り巻く人々の意識の変化と時代の移り変わりを見つめます。

●あらすじ

平成30年12月、鳥取県と島根県にまたがる中海（なかうみ）。日本で5番目に広い湖です。
中海にほど近い米子市彦名町に住む向井哲朗さん77歳。汚れる中海を目の当たりにして、泳げる中海を目標に中海の水質改善、環境保護に独自で取り組んでいます。次の時代を担う地元の子どもたちに呼びかけて、チビッ子環境パトロール隊を結成したり、地域の人たちに呼びかけて環境学習会を開催するなどさまざまな環境改善活動に取り組んでいます。さらに、平成元年から手作りの環境新聞「中海」を毎月発行し、30年目の去年11月で376号を数えました。

広域高速ネット二九六　[2018/11/1放送]

峻厳の答酬
～山武郡市広域行政組合消防本部 新人研修～

◎プロデューサー／藤本健太郎
◎ディレクター／佐藤祐貴

[29 分]

●制作意図

“想いだけでは、人の命を救うことは出来ない”
　それぞれに決意や志を抱き、消防局に採用された新人職員たち。即戦力を鍛えるという使命を受けた新人研修の担当教官たちは、人の命を救うという消防の仕事の難しさを伝えていくため、想像を絶する過酷な試練を与えていく。新人職員たちは肉体と精神の限界に直面し、もがく。
“この指導が現代において許されるのだろうか”
　葛藤しながらも突き進んでいく教官と、それに喰らいついていく新人職員。二ヶ月の密着取材を通して、消防の指導現場の現実を映し出す。
　「お前たちに足りないものは何だ。自分で探せ」
教官の問いかけに対し、新人職員はどのような答えを導き出すのだろうか。

●あらすじ

　東日本大震災以降、各地で災害対策が進められ、地域の消防局にはこれまで以上に大きな役割が期待されている。しかし全国の消防本部ではベテラン世代の一斉退職期を迎え、消防力の低下は避けられない。そんな中、現状を打開すべく動きをみせている消防本部がある。東日本大震災で津波被害のあった地域を管轄とする、千葉県の山武郡市広域行政組合消防本部だ。成田国際空港にも近接するこの消防本部では、災害対応に加え、2020年東京五輪におけるテロ対策の役割を担うべく2015年に高度救助隊を発隊。同時に、若手を育成し消防力の底上げを図るべく、県内で最も過酷な新人強化訓練を開始した。

伊万里ケーブルテレビジョン
[2018/9/11放送]

地域力の創造！
栄町「支温の家」より

◎プロデューサー／大鋸あゆり
◎ディレクター／大鋸あゆり

[42 分]

●制作意図

番組の主人公の井手薫さんとは、井手さんが市役所勤務時代から仕事上での知り合いだった。現役時代からアイディアマンだった井手さんが、高齢団地の課題解決に取り組んでいると聞き取材を始めた。それは予想通り、他地区のモデルになるような素晴らしい取り組みの数々だった。「すぐに結果が出るとは思っとらんとよ。10年付き合うつもりで取材してね」という栄町の取り組みにカメラを向け、ニュースやコーナーで放送を続けてきた。その活動が10年という節目を迎えたため、一本の番組にまとめた。

●あらすじ

人生100年の時代に向かう中、どうすれば地域とのつながりを保つことができるのか。高齢者が社会のためにできることは何か。行政に頼ることなく自ら問題に立ち向かってきた大坪町栄町の10年間の取り組みを紹介する。

エコーシティー・駒ヶ岳
[2019/4/15放送]

ざざ虫漁としげまさん

◎プロデューサー／大沼和也
◎ディレクター／大沼和也

[20 分]

●制作意図

高齢になっても元気に頑張る重眞さんの姿を見て、地域の伝統文化を記録したいと思ったのが制作のきっかけ。一見グロテスクな水中生物を、厳しい寒さの中、平気で楽しみながら捕らえる重眞さんの想いを切り取りたいと思った。自分の生きがい(生活の張り合い)とは何なのか考えてみたくなった。

●あらすじ

長野県南部、伊那谷の郷土食として親しまれる昆虫食「ざざ虫」。歯ごたえと独特の風味が特徴の佃煮など、珍味として根付いている。その伊那谷の冬の風物詩、天竜川のざざ虫漁を趣味で５０年以上楽しむのが、菅沼重眞さん。地元の小学生に漁の方法を教えたり、手作りの佃煮をまわりに振舞ったりするしげまさん。しげまさんの川に対する思い、子ども達に伝えたいことは…。

秋田ケーブルテレビ　[2019/3/31放送]

別れの乳房
～97歳 赤十字従軍看護婦の証言～

◎プロデューサー／高橋伸明
◎ディレクター／樋渡大基

[45 分]

●制作意図

　終戦から 73年が経ち、当時の記憶はどんどんなくなってきています。
　戦争を経験した人も少なくなってきた今、日本赤十字社の従軍看護婦として実際に戦地へ行った女性ふたりににお話を伺うことができました。
　今、平和になった日本で生きる我々にとって、彼女たちが生きてきた時代を想像することすら難しくなっています。彼女たちの生々しい体験を伝えることにより、今を生きる人々に何かを感じ取ってもらえればと思い制作しました。

●あらすじ

　赤十字はもともとは戦時救護のために作られたものでした。日本赤十字社の設立も西南戦争がきっかけでした。
　第二次世界大戦では兵隊同様に救護看護婦のもとにも赤紙による召集がありました。そして、たとえ子どもがいても、看護婦達は否が応でも戦地へと向かう時代だったのです。
　戦地ではどの様な状況だったのか、元日赤従軍看護婦である91歳の船水さんと97歳の田口さんにお聞きしたインタビューを中心に日赤の成り立ちや戦時救護に青春をかけた日赤看護婦に迫り、平和の尊さを考える作品です。

中部ケーブルネットワーク

[2019/4/29放送]

天災は忘れた頃に…
入鹿切れ 死者941人

◎プロデューサー／仙田章
◎ディレクター／渋川和憲

[25 分]

●制作意図

明治維新150年ということで、明治元年に発生した災害「入鹿切れ」を取材しました。大災害が、ほかでもない私たちの町で起こる可能性を過去の災害から学び、地域防災について考えてもらうため、１年かけて「エリアＮＯＷ」という番組のシリーズ企画として3回にわけて特集しました。

その後、令和元年に合わせ、番組を再構成し25分のドキュメンタリー番組として放送しました。

特にアピールしたい点は、風化していた地域の歴史を紹介するだけでなく、同じ被害が現在も起こる危険性を取材し、過去の災害から学ぶ重要性を伝えた点です。

●あらすじ

明治元年に941人の命を奪った災害「入鹿切れ」。時代の転換期と重なったため、詳しい資料も残されず人々に知られることなく風化していました。

そんな中、災害を親から子へと、今も伝え続ける家や地層から災害を検証するNPO団体、不明とされていた被災地の謎に迫る学芸員など、災害を未来に伝えようとする人々がいます。彼らの取材から見えてきたのは、今でも起こりえる災害の危険性です。

150年前の災害が、今 伝えることは…。現在の私たちにも通じる危険性について警鐘を鳴らします。